

## 「コウナイの石」・5

～考察の周辺～（仮説）

東光部 土井眼科 土井治道

### 「コウナイの石」の位置

この石のある家島町（全部で27島）は、もちろん兵庫県である。「コウナイの石」は、その家島町の西島の西部の山上に位置する。本州とは、有名な観光地でもある赤穂御崎と最短距離（約9km）にあり、相生市の金ヶ崎（国民宿舎あいおい荘）の真南（約11km）の地点にあたる。この辺りは古代も播磨だったのだろうか？

### 古代・吉備王国の範囲

「播磨国風土記」には明石郡と赤穂郡の記載がない。明石郡の記載は冒頭の部分に当たるとされ逸文の存在などから遺失したものと云われているが、赤穂郡の部分は初めから無かったのでは、という説もある。

JR時刻表の鉄道地図の駅名を見ていて前から不思議に思っていたことがある。それは、赤穂線の「備前福河」駅。ここは兵庫県である。想像だが、風土記の書かれた頃、赤穂郡の地は播磨ではなかったのでは、なかろうか。

おとなりの岡山県には、古代に吉備王国があり、その範囲は西は尾道、東はナント加古川までだったと云われている。加古川の日岡神社の稲日大郎女（印南別嬢 = 景行天皇の奥様 = 宮内庁管轄の御陵）[景行朝 = 12代]は、吉備津彦命（四道將軍の一人）[崇神朝 = 10代]の姪ごさん？でしたよね。と云うことは、モモタロウは姫路市内をも闊歩していたことになる。兵庫県内では「きびだんご」は買えないのに。とっていたら、ある古代人モドキが教えてくれた。山陽自動車道の白鳥P.A（姫路市内）にあったよ、って。脱

線！

### 「天ツ」島について

JR時刻表の鉄道地図のルートとも云うべき江戸時代の古地図「大日本道中細見記」（1864年頃）には、家島と小豆島の間に「天ツ」島？が記載されている。ほぼ「コウナイの石」がある西島の場所に！これを兵庫側の当局に問うと岡山県のだと言われ、岡山側に問うと兵庫県ののだと言われた。まさに「天国の島」になってしまった。



(図1)「大日本道中細見記」(全国地図の一部)

### 家島のことについて

この石が有る西島は、昔、「高嶋」と呼ばれていた。この島の南に現在の高島が有るからヤヤコシイ。西島⇄大高嶋⇄高嶋。高嶋⇄小高嶋、だったようだ。家島町は真浦、宮、坊勢の三地区からなる。宮には、「天ツ神」を祀る「家島神社」(式内社・大)があり、また坊勢島と西島との間には干潮時に徒歩で渡れた「海(天)の浮橋」があった。このことから、何を連想しますか？また、吉備国？、高嶋、石神、大社。これから何かを連想しま

せんか？（ ）

神様について

「コウナイの石」が神様なのか、ただのデカイ石なのかは、私には未だ分からない。しかし「コウナイの石」は不思議である。南面は、中国の殷の青銅器の「神」を表わすという饗鬻紋（とうてつもん）にも似て、目や顔のようにも見える。南西にはウマトサル?!

中央の割れ目の幅は、見る角度と、刻々変わる日の光と陰によって変化する様に見え、それに連れて石神の表情も変わるように思われる。割れ目の東側の上部が突出して、南西から見ると、まるで、その厚みの部分にキズが付いた閉まり切っていないヒラキ扉のようにも見える。割れ目の向きも問題だ。割れ目は真南を向いている。測定誤差2～3度はズレているにせよ真南を向いている。偶然?、太陽神?、アマテラスオオミカミ?、アメノヒボコ?。

天日槍（アメノヒボコ）（♠）は「四天王寺ワツソ」ではパレードをする。古代朝鮮からの渡来の集団?。「播磨国風土記」にも多くの記載がある。家島に程近い姫路市の網干区、龍野市、（新宮町）宍粟郡など揖保川流域に多く登場する。在地の神（葦原のシコフ）に上陸を請い「揖保川の河口に留まれ!」と言われて「海中に留まった」とも。上陸後、播磨で大戦争をやり、宍粟郡から但馬へ。「記紀」では淀川、近江、若狭を経て、日本海經由但馬の出石神社に鎮まったヒボコ。大和政権の成立と関係するヒボコと、銅鐸や銅剣との関係は?。よく分からないが、ヒボコがやって来たのは歴史上、日本に馬やあらたな鉄作り法が伝来した頃と一致するらしい[垂仁朝=11代;古墳時代前期:4世紀初頭?](♣)。

古代製鉄の発祥地

「日本の古代製鉄の発祥の地は（揖保川のもう一本、西に位置する千種川の上流の）千種町の岩野辺（岩鍋）とされ、ここから出雲

（島根県広瀬町）へ白鷺に乗って製鉄技術を伝えたのが金屋子神だ」と伝えられている。備前・長船の刀にしる、三木市の金物にしる、その発展のルーツは吉井川、千種川、揖保川、加古川等の上流域での古代製鉄にあると云われる。

奇妙な符合

三木市の金物資料館には片眼の神様「天目一箇命（アメノマヒツツの命）」の神像の掛け軸が揚げてあり、西脇市の大木には、「天目一神社」（式内）がある。鉄作り、刀鍛冶の人々の神様だと聞いていた。鉄工業と眼外傷は切っても切り離せないが、この失明の事故のオマモリに、鍛冶の火の粉で片眼になったと云う「アメノマヒツツの神」が祀られていると思っていた。

「コウナイの石」の南西面の泣き顔を思い出して頂きたい。まさに「天目一神」ではないだろうか。石凝姥?。しかも、この「天目一神」と「天日槍」とは同一（族）神だ、とも云われているのである。「アメノヒボコ」が片眼であるとは何処にも書かれていないのに!

播磨国風土記によると「(既存の)石神の顔を切り裂き、一瞳を掘り取ったのは応神天皇の代のこと」[応神朝=15代;4世紀末]とされる。ただ、「コウナイの石が作られた?」のは、今となっては、前の世紀にあたる古き昭和時代の事であった、かもしれないのである。

この度は、「コウナイの石」にまつわる様々なことを記した。私は今、思考の視野がとても狭くなっていると思う。もっと大局的に物事を見るべきと思う。確証めいたことは一つも無く、年代考証もせず、非常に独り善がりの説を述べているように思える。しかし、いろいろな文献などを調べてみると、不思議と自説に相応しいものばかりが目に入るので、少々逆に気後れもしている。皆様のご批評を仰ぎたい。

稿を終えるにあたり「コウナイの石」の伝説を記しておく。

『こうないの石』

坊勢島の西方『しもら』には人は住んでいない。地蔵が十体と石碑があり、そのかみてには畳、三畳ほどの岩がある。この岩はその近くの松島の石と同様に美しい石であった。昔、一人の石工が石を切り出していると、突然石から血が流れでてきて、「わしはこのままお前に切られて死んでゆが、『しもら』のかみてのこうないの伯母さんの石だけは切ってくれるな」という声が聞こえてきた。この石工はそのまま寝込んで死んでしまった。また、松島の石を積んだ船は風も何も吹かないのに、沈んで、船頭もみな死んでしまったという。「続播磨の伝説」(玉岡松一郎編著1980)より  
(復刻市販中の「伝説の兵庫県」に、記載あり)

参考文献：

「国生みの島」高島一彰(自製本・家島 2000)

♣「日本の歴史1・神話から歴史へ」井上光貞(中央公論)

♠「アメノヒボコ」瀬戸谷皓 他(神戸新聞総合出版センター)

♠「兵庫県史」兵庫県

「日本書紀」～天の岩窟 ほか

！注意！ 現在、現地への一般の交通手段は有りません。

参道の地盤が崩壊して来ています。100m転落注意！

本文は兵庫県眼科医会報に掲載したものを一部修正し、掲載させていただきました。本会報に掲載をお許し戴きました会員の諸先生、ならびに会報委員の諸先生に深謝申し上げます。

(2001 春 記)

## 今日この頃

東光部 松浦病院 松浦弘治

私は、1999年暮れに京口の松浦病院に勤務し、2000年春からA会員として医師会にお世話になっています。この間、コンピューター2000年問題騒動(ほとんど皆様の記憶から消え去っていると思います)“20世紀から21世紀へのカウントダウン”という時代の変化を感じさせる事件がありました。これからは益々あわただしく移り変わりの激しい世の中になっていくように思います。

とは言ってみたものの私自身はその日暮らしというか、ふと我に返って気付くと、知らないうちに一日、一週間と過ぎており、激動の世相とは別の生活をしているように感じます。そんな中で最近思ったことを少々書き留

めさせていただきます。

御存知の様にテレビ、新聞等で森総理大臣への非難を中心に政治不信が取りざたされています。建設的提言はまったく無く、ある種のショーのようにも思えてしまいます。しかし、見ていてあまりに変であり、わが目を疑うものもありました。

なかでも、宇和島水産高校の実習船と米国潜水艦の衝突事故の際に、ゴルフ場でとった行動は批判されて当然だと思います。責任感が全く欠如していると感じます。若し、ご自分の家族、親戚や友人が事故にあったならば、森総理は全く違う対応をしたと想像します。我々医師は自分の受け持ち患者様の急